おおさか発・プラスアルファ

ニュースUP

# 変わりゆくミャンマー　進まぬ「ヒ素対策」

## 安全な水　支援手探り

ミャンマーの医療支援を続けている岡山市のNPOが、現地の井戸水に含まれるヒ素対策に乗り出した。汚染井戸はアジア各国で、80年代にボランティアなどの協力で掘られたものに多い。海外からの支援が相次ぐが、軍事政権が続いたミャンマーでは、実態把握も支援も遅れがちだ。11月、NPOに同行し、支援の現場を見た。

福山支局
村本聡

これまでは、井戸水を1日置いてゴミを沈殿させ、上澄みを調理に使い、飲料水は雨水に頼っていたという。「安心して飲める水が手に入るようになり、うれしい。大変ありがたい」。村長に安堵の表情が浮かんだ。

### ■草の根で医療交流

岡田さんは、医療支援を通じてミャンマーと長年関わってきた。出合いは88年、在籍していた京都大主導でヤンゴンに総合病院を建設する国際協力機構（JICA）のプロジェクトに参加した。「必要な物が何にもない」現地の医療の遅れを痛感。ミャンマーのことが頭を離れなくなった。

90年に岡山大に赴任、93年から毎年、文部省（当時）の科学研究費に同国との共同研究を応募したが、軍事政権下での研究継続が不安視され、断られ続けた。96年にようやく採択され、「遺伝性貧血」をテーマにDMRと共同研究を始める。02年には岡山大とDMRが大学間協定を結び、交流を続け、定年退官後の06年3月、同協会を設立した。

協会の活動の柱は教育だ。これまでに同国の若手医師30人を受け入れ、岡山大で研修を受けさせた。

ミャンマーの女性のがん死亡トップ、子宮頸がんの検診法を学んだ研修生が、帰国後はミャンマー初の子宮頸がん検診センターで無料検診をするなど、第一線で活躍。また、岡山大の形成外科医らを派遣し、手術しながら若手医師に技術を伝えている。

「一生懸命学ぼうとする意欲にあふれる目。つきあいが長くなるにつれ、そのまなざし、その魅力のとりこになった」。岡田さんのミャンマーへの思いは深まる一方だ。

ヒ素除去装置で井戸水をろ過する東谷健一郎さん（右）＝ミャンマー・アウンタピエ村で11月1日、村本撮影

### ■雨水が頼り

途中からは未舗装のでこぼこ道、ヤンゴンから車で約5時間かけ、約500人が暮らすアウンタピエ村に到着した。NPO「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」＝理事長、岡田茂・元岡山大医学部長(71)＝が、ミャンマー保健省医学研究局（DMR）と協力し、初めて支援する現場だ。大阪府交野市の浄水器メーカー、東洋技研の東谷健一郎さん(36)らがヒ素除去装置を運ぶ。同社は世界最大規模のヒ素汚染が広がるバングラデシュで実績があり、同協会から協力を依頼された。

岡田茂さん

井戸はソーテ村長(51)の自宅敷地にあり、付近の住民30～40人が利用している。東谷さんは井戸水をためたおけのそばに装置を設置し、ヒ素を吸着する「シュベルトマナイト」と呼ばれる鉱物と小石や砂を、たる形の装置の中に敷き詰めた。おけから水をくみ流し込む。DMR職員や村人らに手順を説明しながら、ろ過後の水を飲んでみせた。

### ■実情に合わせ

岡田さんは08年、東南アジアのヒ素被害を雑誌記事で知った。ミャンマーでも、国土の中央を流れるエーヤワディー川南部が汚染され、約75万人が汚染水を摂取しているとされ、健康被害が出始めていた。岡田さんはDMRと協力してプロジェクトチームを設置、調査に乗り出した。

今年3、5月、同国内の計20カ所で井戸水を採取し測定。日本の安全基準の約20倍のヒ素を検出した。蓄積すれば健康を害するという。

「住民が安心して暮らせる医療環境を目指してきた。安全な水が飲めるようにするのは僕らがやるべき仕事だ」

アウンタピエ村では今後、20日ごとにろ過水を採取、ヒ素濃度などを調べる。来年1月に同協会メンバーが再度訪問し、水の使用量や井戸の規模に応じて、装置が何基必要かなどを判断する計画だ。

汚染されにくい深い井戸を掘るのが根本的解決策だが、岡田さんは「掘削機や揚水モーター、発電機などが必要ですぐには難しい。それまでの代替措置にしたい」と、現地に即した支援を模索している。

協会は、08年に13万人以上の死者・行方不明者を出したサイクロン「ナルギス」の被災地を中心とした6カ所に、クリニックを寄贈した。共鳴する人の輪は広がり、現在、中四国を中心に協会の会員は全国に500人以上いる。

感染症など医療もグローバル化が進み、国による医療格差の解消は急務だ。「ミャンマーの切実な状況の改善に少しでも力になりたい。まだまだ前進あるのみです」。岡田さんの言葉は力強かった。

### 浅い井戸増え被害増加

80年代、アジアなど開発途上国で海外からのボランティアらが井戸を広めた。池や川などを飲料水源にしていた生活が一変する一方、90年代から慢性ヒ素中毒患者が各地で次々と発見された。

がんなどの原因になるヒ素は、地中で鉄や銀など金属に付着し自然に存在している。ボランティアや現地住民らが掘った10～20㍍ほどの浅い井戸だと、バクテリアなどの影響で溶出する。NPO「アジア砒素ネットワーク」（宮崎市）によると、バングラデシュや中国などアジア地域で約6000万人が地下水のヒ素汚染地域に住み、70万人がヒ素中毒になっている。南北アメリカやヨーロッパにも汚染地域は見られる。ミャンマーでは90年以降、約40万本の手押しポンプの井戸が掘られ、02年に報告された同国政府の予備調査では、汚染水の利用者は75万人と推計されている。

「ニュースUP」は毎週水曜日掲載です。ご意見、ご感想は〒530－8251　毎日新聞「プラスα面ニュースUP」係。郵便、ファクス（06・6346・8104）、メール（o.talk-news@mainichi.co.jp）へ。